



新たな取り組みにチャレンジしています

フードバレーとがち



菊地亜希

広尾町
菊地牧場

千葉県生まれ。帯広畜産大学に進学し、在学中に夫と出会う。大学卒業後2年間実習生として働き、平成21年に夫婦で新規就農を実現。地域の若者で構成する「ピロロフェス」では実行委員長も勤める。

消費者と生産者をつなげる牧場を作ります!!

■些細な事も発信し、酪農に興味を持つきっかけ作りをしていきます!

酪農家にとって当たり前の作業も、普段酪農に携わらない人にとっては驚きや感動があると思います。作業日程等を発信し、自由に見学出来るようにするなど、サービスする事に拘わらず広く情報を発信していきます。

■人が集う場所として、牧場を身近に感じられるようなカフェを開店します!

牧場ならではの乳加工品やオーガニック製品を提供し、周囲の人が気軽に牧場に立ち寄れる環境として、加工品を提供するカフェの開店計画の作成も行っています。

いまの課題は?

■現在視察や体験を積極的に受け入れている牧場は、町内で3件しかありません。観光牧場ではなく、生産牧場で出来る範囲の視察や体験を提案し、報酬をもらう仕組みを作ることを受け入れ牧場を増やしたいと考えています。

■住民の地産地消の意識がまだ足りないように感じます。まずは何を生産しているかを知ってもらい、実際に食すことで価値に気づいてもらえるような取り組みを考え実行・継続していきます。

ノルマンディ地方にあるオーベルジュ・ペイザヌ牧場は、多様な施設があり、まさにグリーンツーリズムのための牧場という印象を受けました。



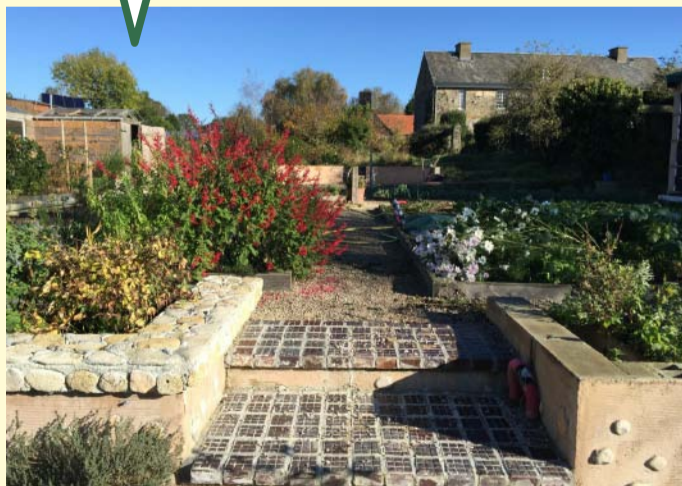
チャレンジ実現に向けた研究内容は?

酪農に興味を持ってもらう為のアプローチ法や、相手に伝えるための手段や内容を学ぶ為、フランスとイタリアで調査研究しました。

パウジャーノでは子どもたちを飽きさせない工夫がすごく詰まっていたのが楽しそうでした。



ペイザヌの農場案内ツアーでは、「農場は自分たちが長い時間を過ごす場所なので、エスティックが必要だ」というこだわりなども伺えました。農場を心地よい空間にするために、施設の空きスペースはブロック分けにして花で飾るなど、とても綺麗に整備されていました。



ギバロという小さな牧場で、シードル作りを見ることが出来ました。すでに10名程の見学者がいて職人さんが黙々と作業を進めていました。特別な説明はなく、聞かれた事にだけ答えるようなスタイルでした。

ペイザヌの飲食施設は、農場で獲れた旬の野菜や豚肉を提供するために場を提供しています。レストランではない!ということにこだわっているのが面白い特徴で、サービスはほとんどなく、全てセルフでした。



フードバレーとがち推進協議会の支援(十勝人チャレンジ支援事業)を活用して、以下のテーマで調査研究を行いました。

【テーマ】 消費者と生産者をつなげる牧場をめざして!~ヨーロッパにおける農家と地域の関わりを学ぶ~

十勝人チャレンジ支援事業とは?

新たな取り組みにチャレンジする人を支える事業。単なる視察旅行ではなく、自身の経営課題を再認識し、その課題解決のために何が必要か調査研究を行い、実践していくものです。